

2020 年度理工学研究科・工学研究科  
「教育・研究等改善アンケート調査」公表のためのコメント

教育・研究等改善アンケート調査の結果について

1) 教育・研究等改善アンケート調査の目的

・理工学研究科が実施する「教育・研究等改善アンケート」は、学部学生向けの授業評価とは視点を変え、研究指導等について、学生満足度評価の色彩を強めた設問により、研究指導体制や研究教育環境の改善に資する項目にしている。協力いただいた大学院生には感謝したい。

教育・研究等の改善を高めるための自己点検活動・FD活動の一環としてここに公表する。

2) 調査方法、調査実施時期

・アンケート調査は、回収率を高めるために、教員による配票・回収により実施した。

・配票・回収期間は 2020/11/17～2021/1/08 で実施した。

・博士前期課程については、在籍者 141 名（2020/10/1 時点）のうち、120 名（回収率 85.1%、昨年度 89.3%）の回答を得た。

・博士後期課程については、在籍者 11 名（2020/10/1 時点）のうち、7 名（回収率 63.6%、昨年度 75%）の回答を得た。

すべての項目において高い評価を得ているが、個人が特定される可能性を配慮し、詳細の公表は行わない。

3) コメントおよび対応

①大学院進学情報提供

・博士前期課程への進学理由の第 1 は「研究内容への関心」、第 2 は「就職に役立つ」である。昨年の第 2 は「担当教員に教わりたい」で、年度によって第 2 と第 3 が入れ替わる傾向にある。

・「大学院進学を考えるのにどのような情報が一番役立ったか」との問いで、「研究室教員の紹介」と回答している者が一番多く、博士前期課程 51 名で、教員の影響が大きいことが分かる。

・博士後期課程への進学理由の回答は、「研究内容に対する関心」「担当教員に教わりたい」の順となっている。

・大学院進学決定時期は、4 年次が一番多く、続いて 3 年次で例年と比べて変化はない。今後も研究科・専攻別進学説明会に加えて、各学科の進級ガイダンス、教員から個別の大学院進学説明会を継続して行く。

・学部生に大学院の教育研究の魅力を伝えるイベントとして、昨年までは、川越フォーラムを開催していた。参加者からは、プログラム内容が充実していたとの意見が多かった。今年度は、規模を拡大し板倉・朝霞キャンパスと共同で、研究交流会を企画していた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により実施することが出来なかったため、来年度に向けて感染症予防対策等を十分に行い研究交流会が開催出来るように検討を行なって行く。

・2015 年度から学部と大学院の連携を強化する目的で導入した大学院開講科目履修制度（先行履修）では、2020 年度は 81 名（前年：49 名）で、前年に比べ履修者が約 2 倍近く増えた。

## ②研究指導に関する評価

- ・博士前期課程の研究指導に対する評価では、教員は「たいへん意欲的だった」と回答した者が94名おり、知的満足度を得られたとの高い評価である。また、「何を一番身につけることが出来たか」との問いでは、60名が「プレゼンテーション能力」、「専門的知識」と回答している。
- ・博士後期課程の研究指導についても、「たいへん意欲的だった」と回答した者が多かった。

## ③授業科目に関する評価

- ・授業科目に対する評価は、博士前期課程の73名が「たいへん意欲的だった」と回答している。講義の進捗は「適切」との評価が多いが、少数ではあるが早いとの指摘もある。少人数教育であるため、履修生の状況を確認しながら講義を進めていく必要がある。開講科目数については、「現在の開講科目数で十分」又は「足りている」との回答が多い反面、「少ない」「増やして欲しい」という要望が11名あった。

## ④研究室等の施設環境

- ・研究室・実験室の機器やPCの充実について、「充実している」「まあ充実している」が85名、「どちらかといえば不足している」「不足している」と回答したものが11名であった。指導教員が研究室ごとに事情を把握し、適切に対応できるように努力していきたい。

## ⑤研究発表活動支援

- ・博士前期課程で54名（昨年度74名）、博士後期課程では4名が学会発表を行っている。そのうち博士前期課程19名（昨年度53名）は複数回の学会発表を行っている。論文採録数は、博士前期課程では7名（昨年度18名）、博士後期課程では2名が「実績あり」としている。受賞歴も博士前期課程で7名（昨年度10名）である。昨年度に比べ、今年度の学会発表者が大幅に減少した。この原因は、新型コロナウイルス感染症によるもので、キャンパス内での研究活動が十分に行えなかったこともあり、「研究が思うように進まない」と25名が回答している。
- ・学会発表参加者から、「さまざまなコメントがもらえた」「もっと学会発表したくなった」との感想に対し、85名が今年度は発表を行っていないと回答している。

## ⑥在職やアルバイトについて

在職やアルバイト日数が、週に4日が4名、5日以上と回答したものが21名（昨年：3名）で大幅に増えた。社会人入学の院生は博士前期課程で0名であるが、勤務時間もフルタイムが17名となっている。学費や生活費の捻出に必要な対応かどうか確認できないが、研究活動に支障がない状況かどうか、詳細を確認する必要がある。大学院の教育研究と職場・仕事の両立がやや難しいと回答した博士前期課程の学生数は1名のみであった。

## ⑦TAについて

今年度、博士前期課程の院生で64名がTAを担当している実態がある。大学院生数とTAを必要とする授業科目数に若干のアンバランスもあり、9名が負担を感じていると回答している。TA担当については、依頼する教員と大学院生側の十分な調整が必要である。教育補助を担当することは研究者・教育者としての素養を養うことにも役立つため、前向きに取り組む姿勢を期待している。

#### ⑧総合評価

全体としては、満足している（とても満足、満足、まあ満足の合計）とする評価が 104 名（博士前期・博士後期課程 89.4%）であるが、不満（不満、やや不満、あまり満足していない、の合計）が 8 名（昨年度 2 名）である。昨年度に比べ、不満と回答したものが 6 名に増えているが、新型コロナウイルス感染症の影響により、学内への入構制限で十分な研究活動を行なう事が出来なかったことも原因の一つと考えられる。それぞれ個別の評価内容を踏まえて、改善が出来るところは見直しを行なう。

以上

2021年2月25日

理工学研究科長 吉田善一